

Daily Chronicle

連載 11084回

流さぬゆく日々

寛容と否定の狭間に ①

五木寛之



家にもよく理解できる内容で有難かった。

新聞紙上に発表された文章には、△現代日本の「不寛容論」▽という見出しがついている。また△森喜朗氏 辞任劇の落とし穴▽という見出しもそえられているが、これは新聞社側がつけたものかもしれない。

森本さんはキリスト教神学、宗教学を専門とする学者である。しかし、この論考はどんな立場の読者にも納得のいくわかりやすい文章だった。しかし平易な文章だからと

2月28日の産経新聞オピニオン欄に、森本あんり氏の文章が掲載されているのを興味ぶかく読んだ。
森本氏はアメリカの反知性主義についての論考や、近著『不寛容論—アメリカが生んだ「共存」の哲学』（新潮選書）など、刺戟的な著作で注目を集めている思想家である。米国のポピュラリズムについての啓蒙的な本など、私のような不勉強

家にもよく理解できる内容で有難かった。新聞紙上に発表された文章には、△現代日本の「不寛容論」▽という見出しがついている。また△森喜朗氏 辞任劇の落とし穴▽という見出しもそえられているが、これは新聞社側がつけたものかもしれない。

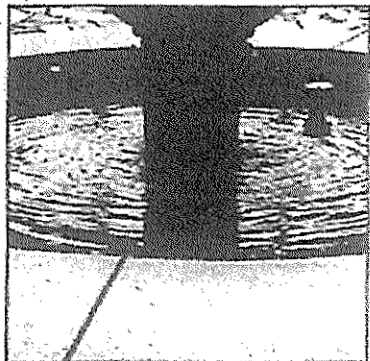


PHOTO 石山 貴美子

本という国には、古来から「本音」と「建前」という2つの世界がある。私自身、その2つを日々使い分けながら暮らしている。男女の差別は許せない、と建前では口にしながら、その意識の深部にうずくまる差別感を自覚しない男性がいるだろうか。もしアタマとカラダの乖離を意識しない男性がいるとしたら、それは単なるバカである。

他人をバカ扱いしてはいけない、と私も意識はしている。自分が利口だなどと思う人間がいたとしたら、そちらのほうが本物のバカだろう。しかしほとんどすべてのは、身体の奥深く女性に対する差別感を宿

いって決してポピュラーな内容ではない。森喜朗問題という時事的な話題に触れながら、いまの私たちのなかにも出さされている意識を明快に掴みだし、分析させてくれるところが刺戟的だったのだ。

本という国には、古来から「本音」と「建前」という2つの世界がある。私自身、その2つを日々使い分けながら暮らしている。男女の差別は許せない、と建前では口にしながら、その意識の深部にうずくまる差別感を自覚しない男性がいるだろうか。もしアタマとカラダの乖離を意識しない男性がいるとしたら、それは単なるバカである。

私も発言したり文章を書いたりする際に、差別的な表現にならないかを無意識のうちにチェックせざるをえない。自分の本音が抜き難い差別感に骨がらみになっていることをいつも自覚しないではいられないからだ。
森 本氏は言う。ポロツと本音をもらした人物に対して、建前と本音の不一致を糾弾することはありえても、その内面に疥癬のようにこびりついている本音を批判することはできるだろうか、と。すなわち、△他者を差別する感情は言葉や行為に表現されれば不適切だが、そういう感情を心中秘かに抱くことと自体を咎めることとはできない▽
(この項つづく)
— 協力・文芸企画

花見も密を避け、マスク着用で
図マニア。20代では自転編。やがて35区↓22区↓代田区が港区かほつきり 田川に沿って中野区に組(円)

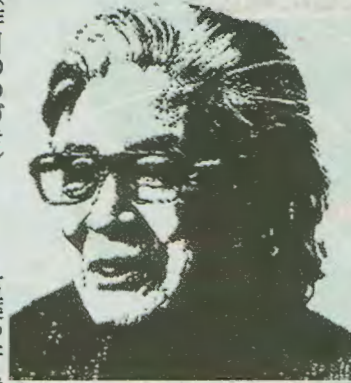
Daily Chronicle

連載 11085回

流されゆく日々

寛容と否定の狭間に②

五木寛之



(昨日のつづき)

世間では一般に、この「本音」と「建前」が一致することを求める傾向がある。

しかし、誰かが不道徳で不法なことを心に抱いていたとする。しかし、それが心の中のことである限り、それを取り締まることはできない。それを実行したときに、はじめて問題となる。へいかに法律といえども心の中まで踏み込んでそれを取

り締まることはできない。というわけだ。

他人者を差別する感情は、言葉や行為に表現されれば不適切だが、その感情を心中秘かに抱くこと自体を咎めることはできない。

と森本氏は言う。

八人が考えていることが高尚か野卑か、外から判断を下されないことが、内面の自由だからだ。(中略)むしろ人の心中を問い詰めすぎると、逆に不寛容を招いてしまう可能性もある。

心中なにをどう妄想す

るかは、問われるべきではない。「外面如菩薩、内面如夜叉」と言うのではない。私自身、心に抱く妄想を罪に問われたりすれば、一日十犯では済むまい。ありとあらゆる不正、不法、不実を心に抱きつつ生きているのだ。

倫は心に抱くだけで法に問われることはない。キリスト者は内面の妄想と実行は同じだと言うが、女性蔑視の感情を心に宿すだけで実社会では批判の対象となることはない。しかし、それを認めた上で、公的な立場にある者の公的な言動や発言は、やはり慎重であるべきだ、と森本氏は言う。歴史的に見て、キリスト教が不寛容であったのは歴史的事実である。また、なんとなく濃厚であるというイメージのある仏教も、決して寛容ではなかった。現在もロヒンギャの問題やスリランカの抗争を思えば、宗教そ



PHOTO 石山 貴美子

のものが非寛容の傾向を示すのは事実である。親鸞を祖とする真宗は「弥陀一仏」という。金子大栄はそれを「選択的一神教」と言った。親鸞も「弥陀一仏」の立場をとりながら、一方で「諸神諸仏を軽んずべからず」とくり返し戒めている。

しかし、いくら心の思ひまで取り締ることができないと言ったところで、人の心中にあるものや無意識に根づいたものは、おのずと外部に現れてしまうのではないだろうか。私自身、建て前で言動を律したところで、心身にしみついた差別観からは決して自由になることはできないことを感じる。さて、どうするか。そこが問題なのだ。

(この項つづく)
協力・文芸企画